

恋に落ちる——なんて言うけれど、一体どこからどう落ちるのか、経験したことのない木兎にはまったくわからない感覚だった。

高校二年、十七歳。彼女と呼べる存在がいたことはあるし、ソウイウ経験も少なからずある。

それでも、『恋に落ちる』という感覚だけはまだ味わったことがない。



「あーあ……」

恨みがましい木兎の溜め息が、ひと気のなくなった体育館に寒々しく響いた。

全体練習が終わって自主練が始まってからこちら、木兎は赤葦と目が合うたびに重く長い溜め息を零している。

いい加減にしてくれ、とはつきり声に出してはいないが、木兎に向けられた赤葦の視線には明らかに「うんざり」が込められていた。

いつも通りのふたりきりの自主練。山盛りいっぱいボール籠が空になったら一旦休憩の合図。ネットを挟んだ反対側の床に散らばったボールを拾い集め、再びスパイク練習を始める前に水分補給をする。

だらだらしているとまでは言わないが、集中力が欠けた木兔の様子に赤葦も呆れを隠さない。

「そもそも同志になった覚えはないんですけど」

木兔にスクイズボトルを手渡しながら赤葦は冷たく追い討ちをかけた。

「……………」

わかっている。赤葦の言っていることは百パーセント正しい。赤葦は自分と同類だ、自分の気持ちを理解してくれる——なんていうのは木兔の勝手な思い込みだったのだ。木兔に反論の余地はなく、ふてくされた気分がますます唇を尖らせる。

木兔のその尖った唇を、赤葦が人差し指と親指でムニッと摘んだ。ぜんぜん痛くはないけれど、上下関係の厳しい他の体育会系部員が今この場面を見ていたらかなり驚くかもしれない。

『赤葦は控えめな空気出しといて、わりと言う奴だよね』と、いつの自主練のときだったか猿杓が言っていたことがあるが、『わりと言う奴』どころか、赤葦は先輩に対しても言

いたいことはつきり言うし態度にも出す。

決して礼儀がなっていないわけではない。しかし遠慮もあまりない。その堅苦しすぎず砕けすぎずの関係性と距離感が木兎には心地良い。……まあ、木兎は先輩だろうが後輩だろうが誰とでもほとんどゼロ距離なのだけでも。

「んふああふいふあ——」

「え、ちよつと、なんでこの状態で普通に喋ろうとするんスカ」

笑いながら、赤葦は摘んでいた木兎の唇を解放した。

「赤葦だけはわかつてくれると思ってたのに……」

何度目だ——と自分でも思う。思うけれど、赤葦を責める気持ちが止まらない。それほどショックだったのだ。

「いい加減しつこいです。次それ言ったら今日はもう自主練やめますからね」

「ええっ！ それとこれとは話が別じゃん！」

「別じゃないです。はつきり言って今日の自主練、ぜんぜん集中できてないですよね？ 怪我でもしたらどうするんですか」

「うう……」

春高の東京都代表決定戦が近いから怪我は困る。それに自主練切り上げのカードを持ち

出されてしまったら、やはり口を噤まざるを得ない木兎であった。

木兎が今日、赤葦に対して恨み言を連発していた理由は、部活前の他愛もない雑談のせいである。

部室に集まった年頃の少年たちの口によく上る話題はバレーボールのこと、教師や学校に対する愚痴、それからやっぱり恋愛のこと。

三年生たちがすでに着替え終わり比較的空いた部室内で、今度は二年生たちが雑談の中心になった。

「もう……胸に一発、弾がズドン！ って感じだった」

鳩尾のあたりに恭しく両手を重ね合わせて小見が言う。

「あれ？ 昨日は雷に打たれたって言ってなかったっけ、こみやん？」

猿杓の入れた茶々に、小見は「うるせーな。似たようなもんだろ」と、あまり同意できそうもない反論をした。

「まあ胸に銃弾食らったとか雷に打たれたとか、どっちにしても物騒だよな」

「比喩表現を覚えましょう、猿杓くん。『恋に落ちる』ということは、それだけ衝撃的だ

ということですよ」

教師然とした小見の口調に皆笑っているが、その発言自体に異を唱える者は誰もいない。先日梶谷の体育館で行われた他校との練習試合のあと、小見が後輩の女の子からピンクのリボンの巻かれたスポーツタオル——いわゆる差し入れをもらった。「いつも応援しています♥」のメッセージつきで。

今この場の話題は、その一件で小見が恋に落ちたということだ。

「簡単すぎない？ そんなに可愛い子だったの？」

思わず零した木兎に対し、「モテ男は黙つとれ！」と全方向からツツコミが入った。

二年でエースを張っている木兎は確かに、ここにいる誰よりもモテる。しかし強豪梶谷バレー部に所属しているというだけでそこそこモテてしまうから、準レギュラーで試合に出る機会の多い小見などは特に、女子から差し入れをもらうことなど珍しくないはずだ。

見た目が自分の好みドンピシャリだったのならまだわかる（……気がする）。しかしプレゼントをもらったり告白をされたりしただけで、そんなに簡単に人は『恋』というものに落ちてしまうのか？ そんなに簡単に『恋』は始まってしまうのか？！

木兎が首を捻っている間も、仲間たちの理解不能で高度な恋愛談義は続いている。

「……そういうものなの？」

隣りで黙々と着替えていた赤葦に訊いたのは「たまたま」だ。しかし今思えば、赤葦なら自分と同じような反応をする——つまり「わかりません」の一言が返ってくると無意識に期待していたからなのかもしれない。

「意外とそんなものだと思いますよ」

「……え？」

「簡単に、と言つていいのかどうかはわかりませんし、人によるとは思いますけど」

「いや、そういうことじゃなくて……赤葦……おまえ、『恋』とか、わかるの？」

「は？」

忙しなく目を瞬かせる木兎と、ぽかんとした表情を見せたあと、ぎゅうつと眉間に皺を寄せた赤葦が向かい合つて数十秒。

気まずい沈黙を破つたのは、木兎にとって衝撃的な赤葦の一言だった。

「はあ、まあ、いちおう。それぐらいは」

「マジで?!」

「……そんなに驚くことですか？」

え、だって赤葦だろ？ 真面目とか堅物のカタマリが服を着て歩いているような男じゃん！ と、ちよつと（いや、かなり）失礼なことを咄嗟に考えてしまった木兎である。

赤葦がバレー部に入部してきて半年と少し。本来なら半年なんてそれほど長い時間とは言えないが、人となりを把握できるくらいには密に接していた。なにしろ際限のない木兎の自主練に、文句も言わず付き合ってくれるのが赤葦ぐらいだったからだ。スパイカーとセッターという相棒的なポジションであるということを別にしても、一般的な先輩後輩以上には仲が良いと思う。

そして木兎は、人を見る目——というより本能的にどういう人物かを察知する力——もあると自負していた。

赤葦京治と言う男は真面目な優等生だが、クールな見た目に反して木兎に負けず劣らずの熱いバレー馬鹿だ。『恋愛』になんて興味も理解もない男である。

……というのが実は木兎の勝手な思い込みだったと今判明してしまった。

「……なんかちよつと裏切られた気分」

「はあ?!」

「裏切り者オ……」

「なんスカそれ」

木兎の理不尽な言い様に応える赤葦の声も自然と尖る。

「おい木兎。後輩困らせてんじゃねえよ。ほら、さっさと練習行くぞ!」

ふたりのやりとりをひっそり見ていたらしい木葉に尻を蹴飛ばされ、木兎は部室の外に追い出された。

物理的距離ができたのと練習が始まったことで、この話は終わったはずだったのだ。

……が。

強豪校として全国に知られている梶谷バレー部の練習はかなりハードだ。そして仮にも二年でエースを担っている木兎に、全体練習中、バレー以外のことを考えている余裕などはない。

しかし練習後のチームミーティングが終わり、二、三年生たちが部室に帰っていく中、木兎は後片付けをしている一年生集団の中にいた赤葦を呼びつけた。

「あ、ここモップかけちゃうので、ちよつと待っていてください」

いつものように自主練のために呼ばれたと思ったらしい赤葦はそう応じたが、木兎に気を遣った周りの一年生たちが赤葦の手からモップを奪った。申し訳なさそうに同級生に片手を上げ、赤葦が小走りで木兎のところに寄ってくる。

「すみません、お待たせして」

「んーん。……あのさ」

「はい」

赤葦は木兎の目の前に立ち、おとなしく次の言葉を待っている。

先輩風を吹かせ、やるべきことを中断させて呼びつけてまで訊くようなことではないと頭ではわかっていた。わかつてはいても、木兎は気になることを腹の中に溜めておけない質だった。

「赤葦のときはどんな感じだったの？」

「は？」

きよとんとした顔で首を傾げた次の瞬間、眉間が顰められる。察しのいい赤葦はすぐに、その質問が部活前の話の続きと気づいたらしい。

「なんでそんなことがそんなに気になるんですか？」

「わかんない……。でも、赤葦だけは俺の気持ちがあわかってくれると思ってたんだもん」

「ご期待に沿えず申し訳ございませんでした」

「ぜんぜん気持ちがあもってない！」

「そりゃ、あんまりこめてませんから。ていうか自主練しないんですか？」

「するけど！ ああもう、この裏切りもの！」

理不尽な台詞を駄々っ子のように吐く木兎を、赤葦は呆れた様子を隠さずに見つめる。

「はあ……、イミわかんねー……」

溜め息と独り言を（でも明らかに木兎に聞こえるように）零しながら、赤葦はボール籠の準備に向かってしまった。

自主練時間に入り、始めはブロックやレシーブのために残ってくれていた他のメンバーも一人抜け、二人抜け……と減っていき、最終的にはやはり木兎と赤葦のふたりだけになった。

人がいなくなると体育館の温度は一気に下がる。しかし今日、一段と冷えている気がするの、明らかに練習に熱の入っていない木兎のせいだった。

他のメンバーがいなくなり、ふたりきりになったあたりから、木兎は「あーあ……」と恨みがましい溜め息を連発し始めたのだ。その溜め息を零すたびに、赤葦の視線や纏う空気が冷えていった。

結局、

——赤葦だけはわかってくれると思ったのに！

——いい加減しつこいです！

——でも！

——次それ言ったら自主練やめますよ！

というような冒頭の遣り取りを一通りして、木兎も黙ったはずだった。……が。

「やっぱり、今日はやめようか……」

脅しのつもりで言ったであろう「やめる」の言葉を、まさか了承されるとは思っていなかったらしい赤葦は急に心配顔になって、スクイズボトルを弄っている木兎の横顔を窺った。

「もしかして、調子悪いですか？」

「悪くないよ」

「でもなんか、元気がない……気がしないでもないです」

「なにそれ。元気ないことはないよ。……けど、まあ、……でもこれ言うとな赤葦また怒るし」

さすがにもう木兎の意味する「これ」がなんなのかわかるのだろう。赤葦は諦めたように、フーツと長い息を吐く。

「……それ、そんなに気にするようなことですか？」

「ん」

「どうして」

「んー……」

どうしてだろう。強いて言えば——悔しい、から？

ハードな全体練習のあとに、木兎さんの際限のない自主練に付き合うのはキツすぎるんですよ……なんて文句を言いながらも、毎回最後まで付き合ってくれる赤葦。

疲れてシンドそうでも、弱音は絶対に吐かない赤葦。

真面目で、律儀で、少し頑固で、でもつい数ヶ月前まで中学生のこどもだった赤葦が、木兎ですらまだ知らないことをすでに知っている。

自分のほうが先輩なのに、お子様だと思っていた後輩に先を越された気がするから悔しいのだろうか？

いや、きっとそれは違う。言動も雰囲気も、赤葦のほうが木兎よりも落ち着いていて大にびていることなんて、自他共に認める事実だ。

たぶん、この半年で赤葦のことをいろいろ知ったつもりになっていたのに、実は表面的なことしか知らなかったということが地味にショックだったのだ、と木兎は結論づけた。

赤葦は大勢いる部活の後輩のうちの一人だ。その「ただの後輩」のことをよく知らなか

ったからと言って、なにがそんなにショックなのかは木兔自身にもわからない。

「赤葦はさ、俺と同じタイプでバレー一筋だと思ってたんだよ。女なんか興味ねえ、みたいな」

「同じ……タイプ？ 木兔さん、彼女いたことありましたよね？」

痛いところを突っ込まれて言葉に詰まる。木兔と同類にされるのは心外だ、と、赤葦の表情と口調にはつきり表れていた。

「かつ、彼女と、そういうのとは……ちょっと、違うし」

「木兔さん、わりと最低なこと言ってるって自覚あります？」

「……な、ないことも……ない」

告白されたら、よほどマイナスな印象でない限り木兔は断らない。そして好きという気持ちがなくとも、その彼女といろいろする。恋愛をしていなくてもセックスはできるからだ。褒められるようなことではないとわかっているが、そういう欲を解消するためには仕方ない……と思っていた。

「で、でも、バレーに集中したら彼女のこととか、わりとどうでもよくなるだろ？」
別れの原因はだいたいそれだった。バレー最優先の木兔に彼女たちは耐えられなくなるのだ。

でもそんなの、今さら変えようがないではないか。

木兎がバレエに夢中なのは事実だし、彼女と一緒に遊んでいるよりもバレエをしていたほうが楽しいのも事実なのだから。その事実を変えたいとも、変えられるとも思わない。

「そういうものですかね？ ……まあ、部活に熱中したら相手に割く意識も時間もほとんどなくなるってのは正しいですけど。それでも俺、ちゃんとその人のこと好きですし。結構ずつと、その人のこと考えてますよ」

「え……現在進行形……なの？」

これまた木兎には衝撃的な発言だった。木兎は先ほど自分がした「性欲を発散させるために、特に好きでなくても彼女は作る」的発言で気まづくなって逸らしていた視線を赤葦に戻す。

赤葦は木兎の問いには答えず、黙ったままコートのほうへと目を向けた。

伏せた長い睫毛が目元に影を落としている。赤葦の横顔は、なんとなく寂しげで切なげだ。

恋とは、人をうきうきと明るい気分にしてくれるものではないのか？

今まさに「恋」をしているらしい赤葦の横顔は、楽しそうにはとても見えないが、それでも、木兎には美しく綺麗に見えた。

羨ましいなあ……と思う。自分が体感したことのない、なにやらキラキラしたものを、他のみんなが、赤葦が、経験しているということが。

「俺も……恋に落ちてみたいんだ……」

——胸を銃で撃たれたり、雷に打たれるような衝撃を味わってみたい。

木兎はコート脇の床に大の字になって眩いた。ポエミーすぎてかなり恥ずかしいことを言っている自覚はある。

でも赤葦はその発言を笑ったりせず、床に寝転んだ木兎の隣りに座り、コートから木兎のほうへと視線を戻した。

「みんながみんな、そんな衝撃を受けるわけじゃないです。……もしかしたら木兎さんもう、落ちたことがあるのかもしれないですよ？ 自分が知らないうちに」

「そういうもんなの？ じゃあ赤葦は？ 赤葦はどんな感じだったの？ 俺に教えるの、そんなにイヤ？」

「俺は——」

赤葦は躊躇いがちにそこで一度言葉を切って、木兎と同じように床にごろりと横たわった。天井を睨むように見上げ、一つ大きく息を吐く。

「眩しくて、目がチカチカして……、とどめに顔面レシーブ食らった感じでした」

「あはは。それ、結構な衝撃じゃん。ていうかバレー馬鹿ならではって感じたな」
それがどれだけの衝撃だったか、木兎にもわかり易い例えだ。

体育館の照明が眩しいのか、赤葦は右腕で両目を覆い隠してしまった。

「でもそれが恋に落ちた瞬間だったなんて、自分では、ぜんぜん気づいてなくて」

「へえ。そういうこともあるのか」

「衝撃が強かったってことしか記憶になくて」

「キョーレツな子だったんだな」

「……ええ、まあ、すっげー強烈だったんですけど」

「ふうん」

淡々とした口調で、赤葦はぼつぼつと言葉を紡ぐ。恐らく、その人物を頭に思い浮かべながら喋っている。

赤葦は床に寝転がり腕で目を隠したままだ。抑揚なく静かに話す薄い唇だけ微かに動いているのが、並んで寝転がっている木兎から見える。でも、こういう表情をしているのかまではわからない。

話し方は相変わらず淡々としている。しかし声音にはその相手への熱く切ない想いが滲んでいる気がした。それがどんな人なのか、木兎はまったく知らないけれど、赤葦が今抱

えている想いの大きさや強さはつきりと伝わってきた。

赤葦は、その人のことが本当に好きなのだ。

——ああ……いやだ。……もう、聞きたくない。

木兔は咄嗟に耳を塞ぎたくなった。

自分がしつこく訊いたことなのに、聞きたかったはずの話なのに。赤葦の声が耳にむず痒くて堪らない。

ばつが悪くなった思いをごまかすために、木兔は起き上がって勢いよくスクイズボトルを傾けた。

「ぶっちゃけて言うと、オナニーするときその人の顔が思い浮かんだんですよ。それで、自分はそういう意味でその人のことを好きなんだって気づきました」

赤葦の口から出てくるとは思わなかった刺激的な単語が飛び出してきて、木兔はちょうど飲み込もうとしていたドリンクで噎せた。

「えっ、大丈夫ですか？」

「んっ……、げほっ……っ、だい…じよぶ」

赤葦は焦ったように床から飛び起きて、木兔の背中を擦ってくれる。

そりやそうだ。赤葦だって健康な男子なわけだし、高校生なんてそういう欲が一番強い

時期なんだから。木兎だってさっき、性欲を解消するためだけに彼女を作っていたようなものだと、最低なことを白状したばかりではないか。

誠実な赤葦は、そのために女と付き合ったりしない。だから自分で処理するのは当たり前なのだ。

ただ、木兎の中で作り上げてしまっていた『赤葦像』から少し外れていただけのこと。で、「いきなりだったから、ちよつとびっくりしちゃった」

「じゃあ今度は、今からそういうことを言いますよ」って前置きします」

「あはは。そうして」

ふたりして顔を見合わせて、苦笑いをした。

開け放っていた体育館の鉄扉から、秋めいた涼しい夜風が吹き込んできて、汗が引いた肌を冷やそうとする。

ふたりは慌ててジャージを着こみ、無言で後片付けを始めた。

みんなが部室でしていた恋バナはとても楽しそうだったのに……。自分のことじゃなくても、聞いているだけで楽しくて温かい雰囲気伝わってきたのに。

——なんで自分は今、こんなに空しくて寒々しい気分になっているんだろう？

「それで？ 我がチームの大エース様は今度の練習試合、大丈夫なわけ？」

木葉が木兎に向かって挑発的に眉を上げた。

「あつたりまえじゃん！」

自信満々に胸を反らす木兎を、周りの面々はニヤニヤと笑いながら見ている。木兎同様二年で常時レギュラー入りをしている鷺尾と、準レギュラーとして頻繁に試合に出場している小見、木葉、猿杵の五人である。昼休み、屋上や空き教室で弁当を食いつつチームについて話し合うのが、この五人が二年に上がつてからの習慣になっているのだ。

もともと木兎は、一年の頃から（自称）大エースだったけれども。——それはそれとして。

次の週末、都内のある高校のバレー部を招いて練習試合をすることになっている。都の春高代表決定戦の常連校チームというわけではないので、いちおう梟谷より格下ということになるが、気の抜けない相手ではある。

公式の大きい大会でなくても、梟谷が他校と練習試合をするときは、他校チームの偵察

や梟谷への進学希望の中学生たちが大勢見学に来る。わざわざ練習試合を見にくる中学生たちはバレー部への入部希望者がほとんどなので、練習試合とはいえ情けない試合を見せるわけにはいかないのである。もちろん、ここに集まっている全員、「情けない試合になつてもいい」などと思つてプレーをしたことなど一度もないが。

「とにかく木兎、あんまり格好悪いところ見せるなよ？」

木葉がしつこいぐらいに念を押す。

「大丈夫だつて！ 試合中の俺はだいたいいつもカッコいい！」

「なんなんだその無駄な自信は……」

「しょぼくれモード発動してないときは確かにカッコいいけどね」

「な」

鷲尾、猿杣、小見が続けた。おまえら、俺を落とすコンビネーションはすでにぴつたりだな?! と言いたい。

「一年生の中でもおまえのプレー見て梟谷に来たつてやつ結構いるしな」

「ふうん」

木葉の台詞に気のない相づちを打ったのは、それが木兎も承知していることだったからで。監督やコーチからも知らされていたし、「だからしっかりしろ！」といつもしつこく

言われていたからだ。

しかし――。

「たしか赤葦もそうだったよな」

「そうそう、それすつげー意外だった！ あいつ、人のプレーになんて影響されそうもないのになー」

会話的内容的に、絶対出てきそうもない赤葦の名前が出てきて、木兎はもとも大きい目をさらに見開いた。

「は？？」

「去年の関東大会の試合でおまえのこと見たんだって。ウチと雀丘と迷ってて、まあ、もともとウチから推薦はもらってたらしいんだけど、おまえのプレー見てウチに入るって決めたらしいよ」

「そんなの聞いてない！」

その場に立ち上がりそうな勢いで声を上げた木兎に向かって、ニヤニヤと笑いながら木葉は続ける。

「そりゃ、そんなこと教えたらおまえが調子にノるからじゃん？」

「ノっちゃダメなの?!」

「いや、今度の練習試合も代表決定戦も、おまえに調子にノってもらわないと困るから仕方ない。教えてやるぜ」

「赤葦にはちよつと悪い気もするけどな……」

「チームのためである！」

木葉と小見はもともと噂好きなふたりなので（いちおうフォローしておく、言うてはいけないことを見境なくペラペラと喋って回るような口の軽さはない）、木兎がしつこく訊くまでもなく、赤葦についての情報を明かしてくれた。

「もともと赤葦って、木兎ファンだしな」

「それもガチの！」

のっけからまた驚きの情報である。嫌われているとは思っていなかったが、ガチのファンだなんて想定外だ。

「そんなこと……赤葦がほんとに言ったの？」

想定外すぎて、つい、疑り深くなってしまう。

「うん。おまえのこと『スター』とか呼んでたもん」

「スター……？」

昭和の有名人か！　とでも突っ込みたくなるような単語のチョイスだ。古めかしいと言

うか……。なるほど、いかにも赤葦が使いそうだ。

セッターだということで入部早々木兎に目をつけられ、捉まった赤葦を気の毒に思った木葉と小見のふたりは、木兎との自主練が辛いのなら逃げる言い訳を考えてやる、と、一年の教室まで言いに行ったらしい。

すると赤葦は「スターと練習するのは楽しいから大丈夫です」と答えたという。木葉と小見の話を要約すると、そういうことだった。

——え、なにそれ。めっちゃ嬉しい。ていうか赤葦、めっちゃイイ子！

木兎がひとり感動している間も、ふたりの話は続いた。

「たまたま見学に行った関東大会の試合で『スター』見つけちゃって、スターに会ってスターとバレーするために梶谷に来た、と」

「あいつ、まともそうに見えて、ちよいちよい言動がおかしいんだよなア」

「おかしいって？」

木兎が訊くと、いや、だってさあ……と、木葉と小見は顔を見合わせて苦笑いする。

——木兎がスパイクに跳ぶとこ見て目が眩んだって。

——キラキラしてたとか目がチカチカしたとか言ってたな。

——あはは。スターだけに？

——あとなんだっけ？　なんか印象が強烈すぎて……、ああそうだ、顔面レシーブ食らったみたいでした、って。

聞き覚えのある台詞が、つらつらと並べられる。

つい先日、聞いたばかりの台詞だった。

そう。木兎はこれらの台詞を赤葦の口から聞いたのだ。はつきりと。赤葦から直接。印象深かったから、一言一句、違わず覚えていた。

あのとき赤葦が話してくれたのは、なにについてだったか？　そんなの、忘れられるはずもない。

赤葦が——恋に落ちた瞬間——だ。

衝撃を受けたその瞬間に自覚はなかったけれど、のちに気づいたと言っていた。その相手を、自分が好きだと思っていることに。

つまり、それって。……それって、さ。

胸の鼓動がはやくなつて、やけに大きく耳に響く。

このドキドキは、試合中の高揚感にとても似ている。

「ほんとあいつ、おまえのこと好きなく」

とどめのように小見に言われ、木兎は知らぬうちに止めていた息をホッと吐いた。

「マジか……」

頬や耳が少し熱い。赤くなっているんだろうなと思ったら、余計に気恥ずかしくなつて両手で顔を覆った。

「いや、まあ今はどう思つてんのか知らんけど」

「しよぼくれモード見て幻滅しちゃったんじゃない？」

「ていうか照れてる木兎がキモい」

「おまえら俺をノセたいの？ 落としたいの?!」

辛辣な言葉を遠慮なく吐く仲間たちを、泣き言を零しながら見つめると、ノつてくれな
きや困るつて言つただろ?! と、木葉がぺちんと木兎の肩を叩いた。

それを合図に、週末の練習試合のオーダーについての話が始まり、その場の全員の顔が
厳しく変わる。オーダーは選手たちが勝手に決められるものではないが、スタメンや準ス
タメンの意見や希望はある程度参考にされ、ときには採用される。

現在の正セッターは三年生だ。彼が二年の頃からなので、長いこと何人ものスパイカー
たちへトスを上げてきたことになる。状況判断も的確だし、もちろん技術的にも問題はな
い。

しかし、現エースの木兎との相性を考えたとき（彼と木兎の相性も悪くはないのである

が)、彼よりもっと木兎と合うセッターがいる——という事実が見えてくる。

「やっぱり今後も、木兎中心に試合を組み立てていくわけだからさあ……」

「監督もコーチも、そこは考えてと思う。今度の練習試合、早々に交代もあるんじゃないかな」

誰も口にはしないが、頭に思い浮かべている名前があった。木兎に、エースに、トスを上げるべきセッターの名前が。

「木兎は？ どう思う？」

猿杓に訊かれ、木兎が即答する。

そんなの、考えてみるまでもないことだ。

「俺は赤葦がいい。——俺は、赤葦が、いい」

おまえら両想いかよ、と、呆れたように木葉が笑った。



週末の練習試合は予想通り厳しいものになった。

当然、エースの木兎は徹底的にマークされていて、木兎のスパイクが一度で綺麗に決ま

ることはあまりなかった。

それでも木兎はしよぼくれることも短気を起こすこともなく、強打に見せかけて軟打したり、ブロックアウトを誘うなどして柔軟に対応していた。

というのもこの試合、いつも以上に観客席からの木兎への声援が多く、モチベーションやテンションを高く保っていられたからだ。

ベンチにいる監督やコーチから、ウォームアップエリアにいる控え選手たちから、そしてとりわけ、彼の人物から（言わずもがな、赤葦である）の『期待』という圧を肌にヒリヒリと感じていた。通常、重荷や苦痛となりがちな過度のプレッシャーも、木兎にとつては好調維持の力となる。

三年の正セッターも、ゲーム序盤は試合の流れを上手くコントロールしていた。

木兎だけに偏らないサイド攻撃、ミドルを使つてのクイック、コンビネーション攻撃等を巧みに組み立てていた。複数人での時間差攻撃や不意のツーアタックなどを適度に織り交ぜ、攻撃に変化をもたせていたのも戦略としてはいい。

やはりエースの木兎を最大に警戒していた相手は戸惑い、リズムもプレーも乱れがちだった。

しかし、できたてのチームや試合慣れしていないチームならともかく、熟練したチーム

はすぐに対策を立ててくるし柔軟に対応してくる。

一セット目の中盤辺りから、最初のうちは決まっていた攻撃が徐々に決まらなくなった。結局、早々に焦れたのは三年の正セッターのほうだった。

要所でのスパイクは相手ブロッカーに阻まれ、ブロックを抜いてもレシーバーに軽々と拾われる。それぞれのスパイカーたちとの連携ミスも少しずつ出始めた。

エース一人に頼りきらない試合の組み立てが悪いわけではない。むしろ試合開始当初は、その他の多彩な攻撃が相手チームを惑わせ、乱していたのだから。

木兔自身はまだ、攻撃参加の度合いが少ないことにそれほど不満を感じてはいなかったが、木兔に託せ——という、ベンチや控え選手、ギャラリーからの圧はかなり高まっていた。それを全身の肌で感じ、木兔は歓喜と興奮で身震いした。

——セッター交代。

一セット目終盤、ようやく閤路監督が動く。

悄然と、しかしどこか不満気にコートから出て行く三年セッターにナンバーパドルを手渡し、赤葦が悠然とした足取りでコート内に入り、己のポジションにつく。

赤葦が対外試合に出場するのはこれが初めてのはずなのに、物怖じした様子はまるでない。焦点は木兔に当てたままだ。

——さあ、今から叩き潰しましょう。

そう言っているかのような強気な視線に肌が粟立った。もちろん期待と興奮で、だ。

セッターが赤葦に交代した途端、木兔へと上がるトスの数が目に見えて増えた。赤葦から託されたボールを、淡々と、しかし豪快に、木兔は相手コートに叩きつける。

木兔を警戒していたはずの相手チームのブロッカーも、勢いづいた木兔を止めることができない。

赤葦はもちろん、木兔以外のサイドやセンターの攻撃も、フェイントも、ほどよく織り交ぜて使った。

結局、赤葦がやっていたことは正セッターの彼とそれほど変わらない。木兔との相性云々は別として、正直に言えば、トス自体の技術もトス回しも、まだ三年の彼のほうが赤葦よりも上だった。

しかし、一つ一つのトスに込められた想いや重みが違いすぎた。そしてその差が、木兔のスパイク数や決定率の差となつて歴然と表れた。

激しい高揚のせいかな、木兔はいつもより数段体が軽く感じていた。自分の背中に羽でも生えたような気分で、大空へと飛び立つ鳥のように、赤葦の放ったボールに向かって高く高く跳躍した。

決めてみせろと強気に上げられるトスも。

どうかお願いしますと懇願されるようなトスも。

アンタにしか決められないんだ、と、百パーセントの信頼と期待が寄せられたトスも。赤葦からのトスはどんなトスだって気持ちが悪かった。

痺れるようなトスだった。腹の底からぞくぞくした。

「木兎さん」と赤葦の声に呼ばれるたびに、快感のようなものが背筋に走って震えた。

ああ……こいつは俺のセッターだ——と、強く思った。

俺だけのセッターだ、と。

練習試合終了後、ストレッチやチームミーティングを済ませて「今日は解散」となったとき、木兎が赤葦の腕を引いた。

まさか今から自主練……？ と若干怯えたような目を向けてくる赤葦に、「軽いストレッチだけ付き合つて」と木兎は笑う。すでに試合後のクールダウン・ストレッチは済んで

いる。これはふたりきりになるための、ただの口実だ。

自分たち以外に誰もいない体育館、ネットだけが張られ、ガランとした広いコート内に木兎は寝転がった。そのまま動かない木兎の顔を赤葦が上から覗きこむ。

「ストレッチは？」

「もうやったじゃん」

「まあ、そうですね」

じゃあなぜ自分を残らせたのか、とは赤葦も訊かなかった。赤葦の初めての対外試合、上手く機能した木兎との連携、お互いに話したいことはたくさんある。

赤葦が隣りに並んで座ったので、木兎は上半身を起き上がらせて大きく伸びをした。

「赤葦、試合どうだった？ 楽しかった？ 俺はすげー楽しかった！」

「はい。俺も楽しかったです」

「んで、めちやくちや気持ちよかった！」

「そうですね」

試合中のことを思い出しているのか、いつもはかなり平淡な赤葦の表情も声音も明るく弾んでいるような気がする。

「特におまえのトスが」

最高だった。全部。今日何十回と上げられたトスと、何十本も打ったスパイクの一つ一つを、すべて頭の中で再現することができるぐらいに――。そんな思いをこめて見つめると、赤葦は一瞬きよとした顔をしたが、すぐに真顔に戻って木兎から視線を逸らす。

「……はあ。ありがとうございます」

「ほんと最高だよ、おまえのトス」

「……あ、はい」

「いつもながらテンション低っ！」

「……喜んでるんです。これでも」

「ん。知ってるけど」

体育座りをしていた赤葦は膝に顔を埋めてしまった。耳と首筋がほんのり赤くなっている。照れているのだ。木兎ほどはつきり喜怒哀楽を表しはしないが、見ていればわかる。ちよつとした表情にも仕草にも声音にも、そして特に視線に、赤葦の感情はちゃんと滲み出ている。

可愛いな……と思った。

好きだな、とも。

基本は冷静で落ち着いているのに、妙なところで年下らしく慌てたり照れたりするのが。

期待、信頼、憧憬、そういうものを全部ボールにのせて、視線にこめて、木兔にぶつけてくるところが――。

「大好き」

胸に浮かんだ言葉が、そのまま口から零れ出た。木兔のその一言で赤葦は顔を上げ、ぎゅっと眉根を寄せる。

「木兔さん……、そういう言い方、やめたほうがいいと思います。勘違い……されるだろうし」

「勘違い？」

「今みたいなタイミングで、……好き……なんて言ったら、言われた相手は、絶対自分のことが好きなのかと思うでしょ」

「ああ、うん。思ってくれていいんだけど」

「……………は？」

「だから、俺が赤葦のこと好きだって、思ってくれていいんだけど」

木兔がきちんと言い直すと、赤葦はぼかんと口を開け、いつもは必要最低限にしか開けていない涼しげな目を見開いて、動画の一時停止ボタンを押された人物のように見事に固まった。

一時停止状態で十数秒経ってから、今度はスロー再生を始めたみたいにくつくりと、ぎこちない声で話し出す。

「……トスが……ですよね？」

「トスも、だよ」

「いや、いやいやいやいや……」

「え、イヤなの？」

「そつ、そういうイヤではなく！」

あ、やっぱりイヤじゃないんだ、と木兔は可笑しくなった。……まあ、それも知ってたけど。

未だ状況がまったく飲みこめてなさそうな困惑した表情の赤葦を眺めながら木兔は続ける。

「俺さー、『おまえと普通に付き合えるやつはもう、自分もバレーやってるやつか一緒にバレーしてくれるやつしかいねえよ！』ってずーっと言われててさー。そんなもんかなーって思ってたんだけど——」

「……………はあ」

「今日の試合で、その通りだわ！　って思ってたんだよね」

「そう……ですか……」

飲みこめない状況は置いておいて、とりあえず木兎の話聞いておこう……と赤葦は判断したようだったが、次の木兎の台詞で、「とりあえず」なんて悠長な態度は取っていられなくなったらしい。

「てことでさ、赤葦、俺と付き合わない？」

「……………は？」

「だって俺たちって両思いじゃん」

「え……………あの……………ちよつ…と……………意味が……………」

わからない、と赤葦の顔にでかでかと書いてある。

思っていることを言語化するのは苦手だが、相手にまるで伝わっていないのでは仕方がないので、とにかく言葉にしていくしかないな、と木兎は考えた。

「えーと、俺って、おまえのスターなんでしょ？」

「……………木葉さんたちですか？」

そうだ、とは言わずにただちよこんと肩を竦めると、眉根を寄せて嫌そうな顔になりながらも赤葦は案外あっさりとそれを認めた。

「そうですよ。最初に見たときからずっと、木兎さんは俺のスターです」

ということ、ここぞとばかりに木兎は畳み掛ける。

「あれも聞いたからな。昨年の関東大会で初めて俺を見たときの感想。あれって、赤葦が前に俺に教えてくれた『赤葦が恋に落ちた瞬間』と同じだろ？　つまり——、」

「も、もういいです、やめてください……」

木兎がすべてを言い切る前に、赤葦から制止が掛かった。そっぽを向かれてしまったが、茹でダコみたいに真っ赤に染まっている首筋や頬や耳が木兎の目に入る。

このクールで男前でときどきめちやくちや可愛い赤葦京治は、そのとき恋に落ちた相手に、現在進行形で恋をしている。

そしてその相手は赤葦のスター、木兎光太郎なのだ。

「ま、赤葦が口で『そうです』って認めなくても、今日の試合でよくわかったけどな」今日の試合が楽しくて気持ちよかったのは、自分の調子が良かったからだけではない。

赤葦から寄せられる期待という大きな圧が、ある種の熱を帯びていたからだ。木兎もよく知っている、そういう種類の——熱。試合中ずっと、熱烈に告白されているような気分だった。興奮した、ぞくぞくした。

「やっぱりさ、俺とおまえて似てると思う。バレーが好きって思いと、そういう好きが連動してるとこ。ていうか切り離せないところが！」

木兎にとって、バレーボールが好きなのも焼肉が好きなのも友人たちと遊ぶのが好きなのも全部同じで『好き』の種類に違いはないけれど、きちんとレベル分けがされている。こんなことを言ってしまうと刺されそうだが、今まで付き合った女の子たちもいちおう全員好きだったのだと思う。ただ、バレーよりも好きの度合いが大きかった子が誰一人としていなかっただけだ。

「ちよつ、ちよつと待つてください。いろいろ理解が、追いついてないです」

混乱の極み、といった様子で、両手を忙しく揉み合わせたり（これは考え事をしているとき赤葦の癖だ）しきりと首を傾げたりしている。そして――、

「ええと……つまり木兎さんは、バレーが好きだから、バレーをしている俺が……好き？」
いつもはどんなことにも○・五秒で最適解を弾き出す明晰で優秀な頭脳が、木兎の予想の斜め上の答えを出した。

「は？」

「つまり……木兎さんのその論理でいくと、木兎さんと俺との間にバレーがなくなったら、木兎さんの興味も俺からなくなる……？」

「ちよ、待て、違う！　そういうことじゃない！」

木兎は慌てて否定したが、赤葦の顔には困惑と失望らしき色が貼りついたままだ。

……おいおいマジでちよっと待て。勝手に失望しないでくれ。

ああ、言葉で伝えるのって本当に難しい！ バレーに関する説明ならわかり易い、とよく言われるのに。もともと、プレー中もいろいろ考えてはいるけれど、言葉で説明する必要などないし、思考がまとまる前に体が勝手に動く。

でも今は、難しいからと言って諦めてしまうわけにはいかないのだ。赤葦がわかるまで伝えないといけない。

「俺は、バレーが好きで焼肉が好きで、俺の『好き』の種類は全部一緒なんだけど、大小……っていうか、好きのレベル？ はちやんとあるんだよ。で、赤葦はその中の最上階レベルにいの」

バレーボールと一緒に、最高、大好きレベルに。

木兔は結局今でも、銃で胸を撃たれたような衝撃も、雷に打たれたような衝撃も味わえてはいない。

いないけれど――。

「まじサイッコーに好きだあー！ って感じるのが『恋』で、そう感じる瞬間が『恋に落ちた瞬間』だって言うなら、俺は毎日赤葦に恋してるし、毎日恋に落ちてる」

「……………」

怖いぐらいの真顔で木兎を凝視していた赤葦は、木兎が言い終えた瞬間、ギョツと顔を顰めた。怒っているのではなくて……、胸に一発、いや、顔面に一発、なにかを食らったような痛そうな表情。そして今にも泣きそうな表情、だった。

傷つけるようなことを言ったつもりはないのに、というかめちやくちや熱烈な告白をしたつもりなのに。やっぱり自分の言葉では、ちゃんと想いを伝えられないのだ。そう思ったら、木兎のほうもなんだか悲しくなってきたしまった。

「あかあし……あの……」

バレーのプレー中以外での、しよぼくれモード発動寸前。こういうとき、宥めたり持ち上げたりしてくれるはずの赤葦に今は頼ることができない。赤葦は赤葦で、なにやら木兎には理解できそうもない陰鬱モードに入っているからだ。

体育座りをしていた赤葦は、木兎から視線を外し、膝の上で腕を組み、そこに顎を乗せて体育館の遠くの壁を睨みながら言葉を発する。ぼそぼそと、赤葦らしくもない歯切れの悪さで。

「そういうところです……。ほんと、あなたの、そういうところが……ムカつく」

「え、ご、ごめ——」

「カッコよすぎて、ムカつく。毎日毎日顔面レシーブ食らわされるほうの身にもなってみ

ろっというんだ……」

口調や声音は完全に恨み言のようだったが、内容は真逆、告白だった。

「なあ赤葦、めちやくちやわかりにくいんだけど、喜んでいいんだよな、それ？」

「大好きだっけって言ってんだから喜んでください」

「え、言っけないじゃん」

「今言いました」

「もっかい！　そこはちゃんと言ってよー」

泣き言を零すと、赤葦は小さく苦笑いしてから、座ったまま尻を滑らせて少し離れていた木兔の隣にピタリと並んだ。顔を近づけて内緒話をするように、木兔の欲しがっていた言葉をふわりと耳に吹きこむ。

「好きです」

すぐにまた離れていこうとした赤葦の肩を抱き、木兔は自分のほうへと引き寄せた。

「俺も好き」

木兔に焦点を合わせたままの赤葦の黒い瞳を見つめながら顔を近づけていく。

そしてお互いの唇がまさに触れ合う——寸前、木兔と赤葦の唇の間に赤葦の手が挟まった。キスを拒まれた形の木兔は、無然とした表情を隠さず不満の声を上げた。

「おい。今の完全にチューする流れだっただろ」

「は？ 流れとか勝手に決めないでください」

「じゃあチューする前に確認すればいいんだな？ 赤葦、チューしていい？」

「嫌です」

「なあーんで?!」

木兎から限界まで顔を背けて、赤葦がボソリと零す。

「……………恥ずかしい」

「は？」

言うに事欠いて、恥ずかしい？ 今さら？？

赤葦の言葉に啞然とすると同時に、腹も立った。そして可笑しくもなった。

恋をしている者同士は、こういう焦れたい遣り取りすらも楽しいのだ。きっと。今の自分たちのように。

「俺をオカズにして抜いてるって言ったくせに、なんでチューが恥ずかしいんだよ」

「デっ、デリカシーなさすぎません?! ていうか俺、はつきり『木兎さんで』なんて言うてませんから」

「なにそれ。じゃあ俺じゃないの？」

「……………」

「俺だろ？」

「……………」

「赤葦、こっち向け」

頑なにこちらを向こうとしない赤葦の頬を両手で挟み、些か強引に自分の方へと向かせ
る。お小言が出てくる前に赤葦の唇を自分のそれで塞いだ。許可なんか、知るか。

しかし固く引き結ばれた唇は何回啄ばんでも解けない。

「赤葦、ちよつとだけ口開けて？」

お願いするように言うと、おずおずと唇に隙間を作ってくれる。再び唇を重ね合わせて、
薄つすらとできた隙間から舌を差し入れた。肩がびくりと小さく跳ね、体に力が入ったの
がわかる。この様子だと、初めてのキスなのかもしれない。怖がらせてはダメだ、嫌われ
てしまうかも……とは思ったけれど、赤葦の唇の柔らかさを少しでも知ってしまったら、
我慢することなどできなかった。口内を舌先でくまなく弄り、舐り、味わう。奥に逃げる
ように縮こまっていた赤葦の舌を誘い出すように撫でて、絡めて吸った――。

結局、赤葦の体の力が抜けきり、重なるお互いの唇の合間から苦しげな吐息が漏れるま
で堪能してしまった。

ちよつとやりすぎたかな……と（いちおう）反省しつつ顔を離すと、赤葦の目の縁が真っ赤に染まっていた。唇も熱をもっているように赤い。きつく睨まれたけれど、そんな色っぽい顔で睨んでも、逆に誘っているようにしか見えないのになあ、と甘く惚けた頭で思う。

「妄想の中の俺のほうがいい？」

こんなこと、もう訊かなくてもわかっているけれど。

「そんなわけっ、……ないでしょ」

今度は逸らかさずにちゃんと答えてくれたので、もう一度、優しいキスを落とす。

木兎が初めて知った、この——恋——が伝わるように。

毎日、恋に落ちている（了）